

セッション3

新しいいのちの福音

プロジェクト

文化の中に入り、その文化が大切にしている物語を福音とともに表す

文化の中に入り、その文化が大切にしている物語を福音とともに表す

目的:この課題の目的は、これに取り組む人が宣教的な視点を持ち、自分が生きている文化を評価するのを助けることです。

目標:「原状」、「現状」、「可能性」、「将来」という枠組みを用いて、文化の中に入り、その文化が大切にしている物語を福音に照らしながら表現します。この課題を自分が慣れ親しんだ文化、あるいは今生活している文化においてすることをお薦めします。

説明:芸術、文学、習慣、あるいは歴史において示されているあなたの文化の一面を取り上げ、そのメッセージにどのように福音を照らし合わせるなら、最もよく輝き、最もわかりやすく説明されるか示します。以下の質問を用いて、考えてみましょう。そして、あなたが取り上げようとしている文化について未信者の人と話すときを持ちましょう。

1 文化の一面を取り上げましょう

- ・文学、芸術、音楽、あるいは大衆文化（ポップカルチャー）
- ・伝統や習慣
- ・信条や確信
- ・その国に伝わっている物語
- ・祭日、休暇
- ・文化的なタブー

2 以下の質問について考えてみましょう。

・その文化の一面を通して、どのようなメッセージが伝達されているか。どのような希望や夢が表現されているか。どのような失望感が表されているか。だれが英雄か。どのような価値観が大切にされているか。

・そのメッセージを創造、墮落、贖い、回復（原状、現状、可能性、将来）という視点で見してみる。メッセージのどの部分を受け入れ、どの部分を拒絶し、どの部分を適応することができるか。

・その文化的な表現を通して、福音によってそのメッセージを最もよく説明するにはどうしたらよいか。

・ここで考えたことをもとに、未信者の人と有意義な会話をするにはどうしたらよいか。

例1: 中国の雷鋒

中国全土で語られている物語の一つは、雷鋒という若い人民解放軍の兵士の物語です。彼は自分を完全に犠牲にしたとされています。雷鋒は息子として愛され、忠実な兵士で、完璧な共産党市民として描かれています。その物語が真実であったかどうかは別として、雷鋒の自己犠牲の物語を、中国のすべての子どもたちが学びます。

この物語が伝えているメッセージには二つの面があります。一つははっきりしたもの、もう一つはあまりはっきりしていないものです。はっきりしているのは、この物語は良い市民について描いたものであることです。しかし、あまりはっきりしていない面とは、この物語は聞き手をコントロールするために造られたものである、ということです。この物語で最も大切なことは物語そのものではなく、それをどのように用い、普通の人々がそれをどのように受け取るかということです。

四章の福音はこの物語について何を語っているでしょうか。物語そのものについて、また物語をどのように語るか、なぜそれを語るのか、ということについて考えてみましょう。

原状:犠牲とは、特にその動機においてどのようなものであるべきでしょうか。罪が入り込む前、犠牲と動機はどのような関係にあったと思いますか。

現状:この物語を聞いた人は、他の人たちにより仕えたいと思うでしょうか。仕えたくないと思うでしょうか。この物語において、犠牲と動機はどのように歪められてしまっているでしょうか。犠牲を払うことが間違っていたり、相手を嫌がらせたりすることはありますか。動機づけることと、操作することとの違いは何でしょうか。見返りを求めながら犠牲を払うなら、そのような「犠牲」はどのように見えるでしょうか。

可能性:福音は操作したり、操作されたりすることからどのように守ってくれますか。福音は自分を犠牲にするためにどのように動機づけますか。聖書的な視点から見ると、犠牲を払うことの目標は何ですか。イエス様の犠牲は、私たちが自分を犠牲にすることについてどのような視点をもたらしてくれますか。

例2: 救い主を求める西洋の文化

“Make a Lover Out of You Yet”

ウォールフラワーズ(The Wallflowers)のアルバム、Red Letter Days より

落ち着くんだ 君は壊れそうだから
自分の言葉で言うんだ あまり叫んではいけない
君の言っていることが さっぱり分からないから

君に近づいてみたら
君はまるで幽霊を見たようだ
だれか君のところに来たのかい
手を伸ばして 上を向こう
目を開けて 次に何が起こるかが分かるように

どんなにすばらしいことが起こるか 君は信じていないね
これから君が人を愛することができるようにしてあげるから

霧が深くて 自分の手が見えない
そこに入った瞬間、ますます悪くなっていく
君はこの水の中のどこかにいるね
水深3メートル 川の流れは止まらない
僕が君を助けたとき、どんなことが起こるか教えてあげる
だれかに助けを求めたら、君にもできる
でもその中に入って、手放さなくちゃいけない
そしたら落ち着いて 砂漠の薔薇のように起き上げる

どんなにすばらしいことが起こるか 君は信じていないね
これから君が人を愛することができるようにしてあげるから

深呼吸して 息を止めてみよう
光に向かって 顔を向けよう
満月の光が君を照らしているのがわかるかい
偉大な未知の世界から助けが来ている
君がそれを一番必要としたときではないかもしれないけど
君はもうここから立ち去ろうとしているね
ここにどどまっていれば、僕が助けてあげられるのに
すべては変わるけど、その準備をしなくちゃ
それがいつ来るかはわからないから

どんなにすばらしいことが起こるか 君は信じていないね
これから君が人を愛することができるようにしてあげるから

私はi-pod を聞きながら、芸術や文学を通して表現されている希望と、私たちが友人に実際に与える助言との間に大きな矛盾があることに気づきました。私たちの文化には、私たちが贖ってくれる愛、変えてくれる愛を願う、ロマンチックな価値観が一貫して存在しています。

私が聞いていた歌は、ウォールフラワーズの Make a Lover Out of You Yet でした。その歌は、人を信頼することができなくなり、人を愛することもできなくなったある女性についての歌です。歌手は、彼女がもう一度人を愛することができるように君を愛するよ、と言っています。彼の愛によって彼女は変えられ、いやされる、というのです。

このような贖いの愛というテーマは、私の文化においては強く主張されています。「シンデレラ」は王子の愛によって苦しい状況から救われました。「眠れる森の美女」と「白雪姫」は愛のキスによって目覚め、悪魔の魔法から解かれました。「美女と野獣」では、美女が野獣を人間に戻してあげました。ハリウッドも、売春婦だった女性がある客の愛によって売春をやめるようになるという「プリティウーマン」のような映画で同じテーマを表現しています。ヴィクトル・ユーゴーの「レ・ミゼラブル」では、ジャン・ヴァルジャンが司祭の善意によって変えられるのに対し、ジャヴェールはジャン・ヴァルジャンの善意に触れることができず、自分を正当化する世界に閉じこもります。

贖いの愛は私たちが切望しているものですが、友人たちにはそのような助言はしません。私は友人に次のようなアドバイスを何度言ったことでしょうか。「彼(彼女)を助けるのはやめなさい！アルコール依存(あるいは買い物依存)の彼(彼女)には、どれほど無責任なことをしているか分からせてあげなければいけないのよ。あなたが欲しいのはパートナーで、子どもではないでしょ。だったら助けてはダメよ。」また、子どもを助けてばかりいる親に向かって同じことを助言します。それは、助けてもらってばかりいて人は成長しないということを知っているからです。

芸術と実際の生活との違いを考えることによって、私はこの矛盾を理解始めました。まず、芸術においては、助けを必要としている人々は悪い状況に置かれた、実際は偉大な人々であるということです。本人の人格に問題があって悪い状況がもたらされたということは一度もありません。実際の生活においては、人々は状況だけでなく、自分自身の問題からも救出される必要があります。次に、芸術においては、救出する人はたとえ多くの犠牲を払わなくても、いつも助けの手を差し伸べます。芸術においては、たいていの場合、救出に伴う犠牲は小さくされていて、全く存在しないか、時にはメロドラマのようでもあります。実際の生活においては、だれかを新しい人に変えるほどに愛することは難しいです。人々の問題はあまりに大きく、また私たちの影響力はあまりにも小さすぎるのです。

私たち人類全体が現実を受け入れていない、と私は思います。私たちの人格にどれほど問題があるか、また人を助けたり、人から助けてもらったりするのも限界がある、ということに認めたくないのです。このようなことを考慮した、ある昔話があります。それは完全な調和の中に生きていた、父親と息子の話です...

では、やってみましょう:

この父親と息子の物語について、四章の福音は何を語っているのでしょうか。

原状:

現状:

可能性:

将来: